

発行：八戸市立市川中学校地域学校連携協議会
校長：馬渡教二 会長：小向龍悦

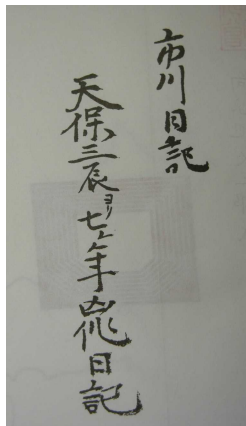
青森県重宝指定の「市川日記」②

〈天保三辰ヨリ七ヶ年凶作日記〉

著者は 向谷地在住の 佐々木太郎左衛門

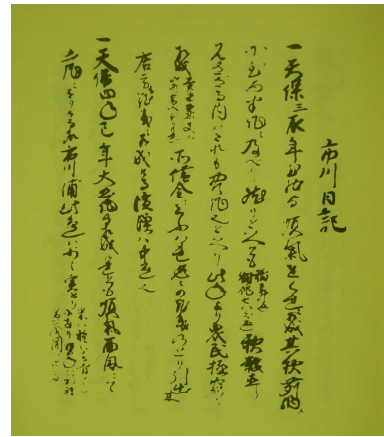
天保三年は稲の収穫はいつもの半分、売値も半額で借金に追われて生活が苦しくなりました。天保六年は四分作。蓄えのある者は困っている人に穀物を分け与えました。天保七年はやませによる低温で、綿入れを着たままで脱ぐ日はなく、稲の穂は出ましたが殆ど実りませんでした。このような大凶作で、人々は実の入らない稗に大根・蕪・雑草を混ぜて食料にするという状態でした。

また、凶作による生活苦のために仙台や松前(北海道)に逃散(土地を捨てて逃げる)する人も数知らず、餓死している死体もそここの辻に見受けられたそうです。



最大の惨事は、天保九年と十年で、特に五戸と七戸地方がひどく、手足まといの子どもを捨てる者が続出しました。雪が降るころには「死者その数知らず」という惨状になりました。太郎左衛門は、このありさまを「鬼ヶ島に異ならず」と記述しています。

天保九年(1838)には馬鈴薯の栽培を試み、4年の歳月をかけて成功しましたが、その方法は高野長英(江戸時代の蘭学者で「救荒二物考」の著者)より正確であると評価されています。✓



〈 標 題 〉

市川日記

〈市川日記の書き出し〉

太郎左衛門は、馬鈴薯を一人隠れて栽培し自分だけが得をしたわけではなく、他の人にも勧めています。その馬鈴薯は、多くの澱粉を含み、また気候・風土を選ばず、不作時の食生活に欠かせないもので、氏は「これこそ土の宝也」と言っています。

終わりに：「この日記は七カ年も続いた天保の飢饉を自らの工夫と努力により見事に乗り切った太郎左衛門の農業経営記録であり第一級の凶作史料であると共に、青森県ジャガイモ栽培に関する最古の資料」です。私は、江戸時代の向谷地にすごい人が住んでいたものだと驚きました。 ※佐々木家の姓は、その後向谷地になっています。

八戸市立市川中学校地域学校連携協議会教育コーディネーター：木村 隆一

参考資料：「八戸市史近世資料編Ⅲ」 盛田稔 解説「市川日記」
奈良孝次郎「市川日記から見たじゃがいもの効用」

